北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

Mallarme の Herodiade について

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2012-11-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 宮本, 多紀雄
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00000791

Mallarmé の Hérodiade について

宮　本　多　紀　雄

北海道学芸大学釧路分校外語外文第二研究室

Takio MIYAMOTO : Sur ≪Hérodiade≫ de Mallarmé.

Sur ≪Hérodiade≫ de Mallarmé

Takio MIYAMOTO

Baudelaire et le Parnasse exerçaient une grande influence sur les poémes de jeunesse de Stéphane Mallarmé. Mais Mallarmé voulut parvenir à la région poétique qui lui était propre. Par suite des études de la poésie et de l'agonie intérieure et longue, il y put atteindre. Il créait enfin sa tragédie d'Hérodiade. Dans son Hérodiade, il creusait une beauté synthétique qui nous contente à la fois la pensée, l'ouïe, l'organe de la prononciation et la chair. Je projette ici de rechercher une beauté synthétique d'Hérodiade et le présage de Mallarmé. D'où j'estime que voici quoi il s'agit.

1) La forme d'Hérodiade.
2) L'incantation dans l'Ouverture d'Hérodiade et le présage de Mallarmé.
3) Hérodiade est la Muse de la poésie qui l'évoque.

Hérodiade est la Muse qui brûle de chasteté, et sa chair vierge symbolise la résistance de Mallarmé au monde extérieur et ses excellentes dispositions pour le présage. Non seulement l'imperfection d'Hérodiade montre la stérilité de Mallarmé, mais aussi elle nous suggère une possibilité inconnue et l'élan de cette œuvre. J'espère vivre avec lui dans sa région intérieure en sondant son présage et une beauté synthétique d'Hérodiade pour concevoir une vraie idée de l'importance des susdits problèmes.

Stéphane Mallarmé は Hérodiade を創作することによつて Symbolisme の独自な詩の領域に到達した．しかし Baudelaire の作詩法を進展させ，Parnasse から自由になることは容易ではなかつた．外的生活は静かな平凡なものであつたが，L'Après-Midi d'un Faune とともに Hérodiade を創作しようとする Mallarmé の内的苦悩は大きかつたばかりではなく，長い年月に亙るものであつた．文明の utilité に盲従したまま対象や状態の再現直後の了承によつて崩壊する生なき無数の実用語が，客観性の名の下に独断的権利を行使している外的世界の最中にあつて，そのような言語の機能を拒絶した内的世界に生きる詩人にとつては，状態や対象の素材を彼の表現したものの中に封じ込めようとする見掛けだけ新しい意図などなかつたのである．

従つて Hérodiade の形式は定形詩の tragédie ではありながら，快感さえ繰返されるならば，無限にわれわれを解放する内的世界の polymorphie なのではないのか．17世紀の古典的自由詩は劇形式によつて新しい境地を開いたのであるが，Hérodiade に於ても独自な劇形式を用いて新し

い内的領域を開いたことが問題となるのである.

実用語の機能を拒絶した詩人は，内的世界に於て文明の utilité から解放された，単なる了解によつては把握し得ない生ある宝物を創造することが仕事となる．しかしこの仕事程，精神的，知的，肉体的な精進を必要とするものはないのである．Hérodiade に於ける incantation が創作されたことに対するわれわれの認識がもつと深く大きなものであつても良いのではないのか．文明の発達とその速度によつて全的に外的世界に拘束され，表面的に了承するだけで早急に万事を解決し行動することしか知らないということは，了解困難な暗い影によつて飲まれることではないのか.

Hérodiade は未完成である．Mallarmé は何故彼の作品を完成し得なかつたのかという問題は Hérodiade の chasteté の問題と関係があるのではないのか.

これらの問題の重要性を，われわれは Mallarmé の長い間の苦悩の中に身を置くことによつても，部分的にしか認識できないかも知れないが，Hérodiade の総合的な美と彼の présage を探求することによつて，彼の内的領域にともに生き，より認識を深めたいと思うのである.

1

Mallarmé は Hérodiade を創作しているとき，財貨や名声を得るために成功するということが作家を如何にくだらない人物にしてしまうかを見抜いていたので，誰もが考えているような作家生活を拒否していた．それは聖者や隠者の出離と同じように生にとつて深い意味を持つていた．より多くの人々によつて，自分の名前を忘れられてしまうのが恐ろしいという自分の名声に依存した栄誉に溺れている人々には理解し得ないような計画すら抱いていたらしい．≪Un homme qui renonce au monde se met dans la condition de le comprendre. Celui-ci dont je parle, et qui tendait vers ses délices absolues par l'exercice d'une sorte d'ascétisme, puisqu'il avait repoussé toutes les facilités de son art et leurs heureuses conséquences, il avait bien mérité d'en apercevoir la profondeur. Mais cette profondeur ne dépend que de la nôtre: et la nôtre, de notre orgueil.≫[1] と Valéry が述べているように，Mallarmé の拒否はわれわれの生の深みの認識と関係があるのである.

Mallarmé の青春時代に於て parnassiens は——詩と科学の融合を提唱した詩人もいたが——文明の utilité を第一眼目として発達して行く近代世界を憎悪するようになり，そして romantisme が近代世界の表面的近代性を代表している面を非難したのである．仰々しい見掛けだけの自我の信仰のために，しまりなく自分の感情を吐露することが人々の拍手を得ることであると思い込み，結局大衆相手に滑稽な芝居を演じていた romantisme に対し，parnassiens は冷静な非個性的表現を用いたのである．しかし彼等は近代世界を嫌悪することより進展しなかつた.

若い頃，Mallarmé も parnassiens と同調していたが，Parnasse の詩は，例えば Leconte De Lisle の Les éléphants のように対象とした素材を表現したものの中に封じ込めようとしたため，新しい意図によつて創作したにもかかわらず，romantisme の表面的近代性を超越し得ないで見掛けだけの新しさに終つた．従つて，≪無形の精神的理念を有形の他者によつて表現≫[2] することもできなかつたのである．Baudelaire の correspondance の作詩法を進展させようとした Mallarmé にとつては，romantisme の霊感に頼るのではなく，Rimbaud と同じように[3] 意識的に全感覚と理知とを方法的に用いて行くことが問題であつた．外的世界や事実の utilité のための思想や，感情が問題なのではなく，内的世界や実在の内部に生き直すことによつて，≪peindre,

non la chose, mais l'effet qu'elle produit.[4]≫が問題となるのである．この Mallarmé の真に創造的な新しい Symbolisme の poétique こそ Hérodiade の創作を可能にしたのである．≪J'ai enfin commencé mon Hérodiade. Avec terreur, car j'invente une langue qui doit nécessairement jaillir d'une poétique très nouvelle…[5]≫と Mallarmé は述べている．

Hérodiade を発表する前に，Mallarmé は青春時代の詩[6] を創作している．1858年に Cantate pour la Première Communion を創作して以来，1863年までに23の詩を創作しているようであるが，この内，接することができた詩は，≪Cantate pour la Première Communion≫，≪Sa fosse est creusée!…≫，≪Sa fosse est fermée…≫，≪La Prière d'une Mére≫，≪Galanterie macabre≫，≪L'Enfant Prodigue≫，≪A une petite laveuse blonde≫，≪A un poëte immoral≫，≪Mysticis umbraculis≫，≪Placet futile≫，≪Le Guignon≫，≪Le Sonneur≫，≪Renouveau≫，≪Contre un poëte parisien≫，≪Soleil d'hiver≫，≪Sonnet≫，≪Aumône≫，≪Le château de L'Espérance≫，≪Les Fenêtres≫ の19の詩である．以上の19の詩に用いられた詩形は ode, sonnet, vere libre classique, terza rima, vers libre, tercet monorime の6詩形であり，これらの詩形はそれぞれ ode が9回，sonnet が5回，vers libre classique が3回，terza rima が2回，vers libre が1回，tercet monorime が1回使用されている．6詩形が21回の中で占める割合の中で，ode が最も多く，次に sonnet であり，ode と sonnet で14回となり3分の2を占めることになる．ode が多いということは Mallarmé が青春時代から詩に於ける musique を重要視していたことを示すものであり，またフランスの定形詩の中で特に精巧優美な sonnet が多いことは，彼が若い頃から詩の精粋を探求しようとしていたことを物語るものである．6種類の詩形に共通していることは rythme が与えられていることである．そして ode, sonnet, vers libre classique, terza rima, tercet monorime の5種は syllabe と rime によつて限定された mesure を持つているのである．Mallarmé は rythme が与えられた mesure と，Cantate の性質の豊かな詩を創作することによつて詩に於ける musique の美を追求していたが，それらの詩は思考と聴覚と発音器官を満足させる美に止つていた．

Mallarmé は1865年2月に≪…mon triste cerveau est incapable de toute application, et ressemble aux ruisseaux balayés par les portières. Je suis un lâche, ou peut-être un malheureux abruti et éteint qui retrouve parfois une lueur, mais ne sait resplendir…[7]≫と苦衷を述べているが，それは単に Hérodiade の創作の苦しみを告白しているのではない．beauté と chair の関係をどのように解決するかが問題となつていたのである．この問題を解決しない限り，Hérodiade の創作は進展しなかつたのである．chair の問題は，jeunesse によつては解決し得ない．jeunesse を克服してこそ chair の問題と対決し得るのである．Mallarmé はこの困難な問題と対決し得る足場を築くために1865年5月に Brise marine を創作した．

La chair est triste, hélas! et j'ai lu tous les livres.
Fuir! là-bas fuir! Je sens que des oiseaux sont ivres
D'être parmi l'écume inconnue et les cieux!
Rien, ni les vieux jardins reflétés par les yeux
Ne retiendra ce cœur qui dans la mer se trempe
O nuits! ni la clarté déserte de ma lampe
Sur le vide papier que la blancheur défend

Et ni la jeune femme allaitant son enfant.
Je partirai! Steamer balançant ta mâture,
Lève l'ancre pour une exotique nature!

Un Ennui, désolé par les cruels espoirs,
Croit encore á l'adieu suprême des mouchoirs!
Et, peut-être, les mâts, invitant les orages
Sont-ils de ceux qu'un vent penche sur les naufrages
Perdus, sans mâts, sans mâts, ni fertiles ilots…
Mais, ô mon cœur, entends le chant des matelots![8]

この詩の詩形は12音綴, rime plate の dizain と sixain とからなる isométrique の定形である. 詩の内容だけではなく形式面に於ても Mallarmé が Hérodiade の詩形にまで到達するために如何に貴重な習作を行つたかが解る作品である. 伝統的詩形の端麗な精粋を継承したとしてもそれに頼るだけでは新しい詩の領域には到達し得ないのである. 彼が12音綴, rime plate, isométrique の定形を用いながらも句切りに変化を与えようとしたことは, 詩に於ける新しい rythme を発見しようとして摸索したことに外ならないが, dizain と sixain の2つの strophes を用いたことによつて伝統的詩形を継承してもいるのである. 真に新しいものを創作しようとすれば伝統的なものと対決しなければならない創造家の苦悩がここに窺え得るのである.

このような形式上の大切な習作とともに Mallarmé は chair の問題と対決したのである. 彼は≪La chair est triste≫と語ると直ちに ≪Fuir! là-bas fuir!≫ と逃亡しようとしている. Rimbaud も同じように≪Je me suis enfui[9]≫と述べている. chair の問題と対決するとこれら2人の偉大な詩人は何故逃亡しようとしたのであろうか. 詩人達の外的には全く目立たない平凡な逃亡には何の意味もないのであろうか. 並外れて優れた資質を備えていたこれらの詩人達が何の意味もなく逃亡することはない. Rimbaud の Une saison en enfer は何の意味もなく創造されたのではない. Mallarmé はこの詩の5行目で ≪Ne retiendra ce cœur qui dans la mer se trempe≫と述べている. そして更に9行目で≪Je partirai!≫といい, sixain の3行目で≪Et, peut-être, les mâts, invitant les orages≫と語らざるを得なかつたのである. chair の問題と対決した Mallarmé は瞬間的に chair の運命を透視したのである[10]. 悲しい生き身とは彼の chair であるばかりではなく, 同時に他者の chair であつたのである. この地上に生きているあらゆる生物の chair であつたのである. 彼は自分の chair によつて, すべての生物の chair の悲しい運命を透視したからこそ, 何ものも海の中に漬かる自分の心を引きとめられないのが解つたのである. 例え汽船に乗つて出帆しても恐らく雷雨はやつて来るのである. 彼は chair の問題と対決したとき Rimbaud と同じく文明が未来に於て chair に及ぼす危険の大きさを察知したからこそ逃亡しようとしたのである. このようにして Mallarmé は chair の危機を自覚することによつて chair を把握したのである[11]. そして chair を未来の危機からどのようにして救うかという極めて重要な課題を解決するためにこそ, 詩に於て chair が問題となる必然性を発見したのである. そしてこのことが Hérodiade の創作を進展させることになつたのである.

思考と聴覚と発音器官と肉体とを同時に満足させる総合的な美の創造こそ Hérodiade 創作の課題である. このような美の創造のために一人の女性を創作したのである. 1864年末に Mallarmé

は散文詩 Le phénomène futur の中でこの女性について語つている．≪J'apporte, vivant (et préservée à travers les ans par la science souveraine) une Femme d'autrefois. Quelque folie, originelle et naïve, une extase d'or, je ne sais quoi! par elle nommé sa chevelure, se ploie avec la grâce des étoffes autour d'un visage qu'éclaire la nudité sanglante de ses lèvres. A la place du vêtement vain, elle a un corps; et les yeux, semblables aux pierres rares, ne valent pas ce regard qui sort de sa chair heureuse: des seins levés comme s'ils étaient pleins d'un lait éternel, la pointe vers le ciel, aux jambes lisses qui gardent le sel de la mer première.[12]≫この女性は決して19世紀中葉の娘ではなく昔の女性である．その女性は至高永遠の女性美に輝いてはいるが，真に新しい美の創造に相応しい女性を発見する手懸りとして連れて来られたのである．そしてこのような習作によつてのみ Hérodiade の創作は可能となつたのである．しかしこの女性の chair は単なる être であつて，最高の知識によつて長年の間保護されて来た物体の一種に過ぎないのである．chair が生命を得るのは action によつてなのである．われわれはこの場合にこの action を外的世界に於ける action と早合点してはならないのである．外的世界に於ける action とは物理的な運動であつて，物理的運動ならば物体にも可能なのである．chair が生命を得る action とは chair が聖化される内的世界に於ける action によつてのみ可能なのである．このようにして Hérodiade は劇形式を選ばざるを得なかつたのである．

Hérodiade の詩形は Ouverture と Scène に於ては12音綴，rime plate, strophe のない isométrique の定形詩の tragédie である．そして Cantique de saint Jean に於ては quatrain の ode であり，各 couplet の詩句の音綴数は6，6，6，4，couplet の数は7，rime の配置はａａｂｂ，ｃｃｄｄ，ｅｅｆｆ，ｇｇｈｈ，ｉｉｊｊ，ｋｋｌｌ，ｍｍｎｎである．

Ouverture と Scène に於ける alexandrin は12の響きの様々な配合を使用している[13]．Racine の Phèdre[14] の単調さに比較すると，Mallarmé が如何に響きの polyphonie を求めたかが解るのである．またこのことは詩句の句切りに様々な変化を与えるので詩形の polymorphie を求めたことにもなるのである．更に Ouverture と Scène とは strophe のない isométrique の詩形を用いているが，これはわれわれに解放感と流動感を与え，内的世界に於て無限に繰返しながら快感を味合うことに可能性を与えるのである．定形詩であるため近代的自由詩のように視覚的に polymorphie を楽しめないが[15]，詩句の句切りの様々な変化による，詩形の polymorphie を定形詩の tragédie に内在させることによつて，内的世界の polymorphie をわれわれに感じさせるのである．

Mallarmé は Ouverture と Scène の strophe のない tragédie の詩形に於て，詩句の句切りに様々な変化を与え，従来の定形詩の rythme から詩を解放して新しい rythme の要素とした．そして La Nourrice と Hérodiade の対話詩によつて劇を構成したのである．これによつて，Hérodiade の作品に action が与えられ，Hérodiade の chair は内的世界に於て生命を得ることによつて聖化されたのである．Hérodiade の気品は保持され，≪Recurez≫，≪Laisse là ces parfums!≫，≪Assez!≫，≪Arrête≫，≪Oh! tais-toi!≫，≪N'entendez pas!≫，≪Garde ta pitié comme ton ironie≫，≪Sois calme≫，≪Pardonne à ce cœur dur≫，というような頻りに用いられる命令口調も不自然でなくなるのである．このような劇形式は，詩句の句切りに様々な変化を与えられた strophe のない詩形を用いたことと相俟つて，われわれの内的虚無に，われわれの思考と聴覚と発音器官と肉体とを同時に満足させる，新しい rythme と内的世界の polymorphie とを感じさせ，真に新しい美の快感を与えるのである．そしてわれわれを詩の新しい内

的領域へ高めるのである．

Mallarmé は劇について≪La scène est le foyer évident des plaisirs pris en commun, aussi et tout bien réfléchi, la majestueuse ouverture sur la mystère dont on est ou monde pour envisager la grandeur,[16]…≫と述べているが，劇とは家族がその前で団欒を楽しみ，それを中心に和合する煖炉のようなものなのである．大きな劇場では観客の群が煖炉と同じような機能と形式とを持つ舞台の前で和合する．Mallarmé は決して劇場を建てようとしたわけではないが，書物を書くことによつてあらゆる奔放さで形式を按排したのである[17]．そして彼は劇形式として手頃な住宅の炉辺で静かに内的上演[18]をなし得る形式を選んだのである．そして人々から離れた所で小さな煖炉の火のような精神の祭りを行うことを可能にしたのである．

2

Mallarmé は外的世界という，時間が一瞬々々具体的仕事や事件に結びつけられている世界とは異質の世界，そこでは時間というものが自由に解放され，何の拘束も受けずに永遠性を保持しているし，時間というものの本来の在り方，純粋な流れも見出し得る世界の内的虚無に対して，われわれの思考と聴覚と発音器官と肉体に同時に美の快感を繰返えさせる新しさを内在させた形式を齎らしたのであるが，これはまた詩に音楽美を導入することでもある．Mallarmé は Hérodiade に於て書物への交響楽の移調を完成する秘術を試みたのである．書物への交響楽の移調について彼は Crise de vers の中で≪un art d'achever la transposition, au Livre, de la symphonie ou uniment de reprendre notre bien :[19]≫であると述べているが，内的上演をなし得る手頃な形式の中に，われわれの宝物を奪い返そうと試みたのである．彼は外的世界に於ける事物や仕事や事件や思想に拘束された実用語の機能を拒絶して，内的世界に於て文明の utilité から解放された，了承によつては把握し得ない生ある宝物を創造しようと試みたのである．彼にとつて外的世界に於ける事物や仕事や事件や思想を記述したり，話したりすることが問題であつたのではなく，内的実在を示唆する（suggérer）ことが肝要なことであつたのである．従つて詩句（vers）は外的事柄に拘束されたまま語（mot）を使用して作つてはならないのである．そして文明の utilité に盲従して何かを実現しようとする意図（intention）や，外的世界で意志を伝え合う言葉（parole）というものは，詩句によつて喚起される感動を前にして消え去らねばならないのである．[20] このような詩句について Mallarmé は≪Le vers qui de plusieurs vocables refait un mot total, neuf, étranger à la langue et comme incantatoire≫[21] と述べている．実用語から隔離をなし終えた全く新しい vers とは呪文（incantation）なのである．従つて incantation とは内的世界の深みに於て，虚無（néant）に遭遇した創造家だけが彫ることのできる詩句なのである．Rimbaud が極めて本能的に incantation を創造したのに対し，Mallarmé は極めて理知的に創造したのである．しかしわれわれが文法に従つて習慣的に使用している言語（langue）とは無関係な，incantation の創作は精神的にも知的にも肉体的にも苦悩を伴つたのである．

Mallarmé は1864年10月に Théodore Aubanel への手紙に≪je vais travailler à mon Hérodiade,≫[22] と書き，Henri Cazalis には≪J'ai enfin commencé mon Hérodiade.≫[23] と伝え，1864年の後半に於て Hérodiade の創作を始めたのである．そして1865年2月には前述したように Eugène Lefébure に対し肉体的苦悩を訴えている．しかも同じ頃 Henri Cazalis に出した手紙では≪je veux commencer une scène importante d'Hérodiade.[24]≫と書き，Ouverture を創作し終らないうちに Scène に関心を向けているのである．このことによつても Ouverture の創作が

困難なものであつたことが解る．同じ年の5月 Henri Cazalis 宛の手紙には≪Or venir à Paris sans mon Hérodiade, qui ne m'apparaît plus que comme un vieux souvenir, est une grande douleur et une humiliation.[25]≫と述べ，6月か7月の手紙では≪J'ai laissé Hérodiade…[26]≫と書いているが，精神的苦悩と屈辱を噛締めながら Hérodiade 創作を放棄しているのである．10月の Théodore Aubanel 宛の手紙では≪je commence Hérodiade[27]≫と書いて漸く L'Après-Midi d'un Faune の創作から Hérodiade の創作へ再び帰ることができるようになつたのである．1865年2月頃 Ouverture の創作を投げ出して以来，それに対し Mallarmé は関心を抱いてはいたが余り進捗せず，1866年4月 Henri Cazalis 宛の手紙に於ても未だ粗描の状態にあることを表明している．しかし彼が≪J'ai écrit l'ouverture musical, presque encore à l'état d'ébauche, mais je puis dire sans prèsomption qu'elle sera d'un effet inouï…[28]≫と述べたように，この音楽的作品を未聞の効果があるものにしようとしたからこそ，このように苦悩を伴つたのである．そしてこの恐ろしい苦悩によつて彼の思考は外的世界に緊縛された思想によつてではなく，思考それ自身によつて思考され，虚無の清澄な概念に達したのである．彼はこの点について次のように語つている．≪Tout ce que, par contrecoup, mon être a souffert, pendant cette longue agonie, est inénarrable, mais, heureusement, je suis parfaitment mort, et la région la plus impure où mon Esprit puisse s'aventurer est l'Éternité, mon Esprit, ce solitaire habituel de sa propre Pureté, que n'obscurcit plus même le reflet du Temps.[29]≫．彼の精神が冒険を試みることができる領域は，時の反映をすらもはや曇らせることのない，彼の精神，詰り永遠であつたのである．

このような領域には，parole から隔離をなし終えた全く新しい vers である incantation という表現形式によつてのみ達することができるのであり，その形式による内的上演を外的世界とは別次元のものに高める Ouverture に対し，正確な記述や外的行為のような文明の utilité に限定された行為を探し求めるのは無駄なことである[30]．そこでは詩の中の語はもはやそれらの本来の色彩を持たなくなり，音階の中間過程に過ぎないと思われるまで重なり合つているのである[31]．

Mallarmé は1864年末に≪Un ciel pâle, sur le monde qui finit de décrépitude, va peut-être partir avec les nuages[32]≫と語り，世界の凋落による chair の危機によつて chair を把握したのである．しかも Mallarmé の絶望は深いものだつたのである．

Désespéré monter le vieil éclat voilé[33]

そしてこの深い絶望こそが彼を内的世界へ飛躍させたのであり，この永遠を見出し得る世界に飛躍し得た彼には過去を呼び起すことが可能になつたのである．

Une voix, du passé longue évocation,
Est-ce la mienne prête à l'incantation ?[34]

それだけではなく外的世界とは別次元の内的世界にのみ実在し得る虚構を築いたのである．文明の utilité に追われる思索や外的世界に緊縛された感覚を欺く過去の幻影，錯乱，迷いを描いたのである．彼はこの嘘を光栄ある虚構[35]と呼んだのである．そしてそこに実在の意識を抱き，ないことが解つている夢の中に湧きあがる，魂やあらゆる神聖なものを歌う素材の光景を表現し

たのである．

La chambre singulière en un cadre, attirail
De siècle belliqueux, orfèvrerie éteinte,
A le neigeux jadis pour ancienne teinte,
Et sa tapisserie, au lustre nacré, plis
Inutiles avec les y eux ensevelis
De sibylles offrant leur ongle vieil aux Mages.
Une d'elles, avec un passé de ramages
Sur ma robe blanchie en l'ivoire fermé
Au ciel d'oiseaux parmi l'argent noir parsemé
Semble, de vols partir costumée et fantôme,[36)]

永遠という虚無を見出した Mallarmé にとつて取消された過去とは何であつたろうか．それは本当であつたことがなかつたものなのである．外的事物や仕事や事件や行為や思想によつて腐蝕されてしまつた人々にとつては，現実的と思い込んだ衝撃による刻印を押された時間しか問題にならないため，過去とは過去にあつた事柄の現存する証拠や資料に拘束された過去なのである．しかし現実とは常に現在に於て確認され得る事実であつて，一瞬間前の事柄ですら現在確認され得る事実ではないのである．況して遠く長い過去とは現実ではないのである．現実ではない過去を現存する証拠や資料によつて判断するということは主観的判断ではあり得ても，客観的判断ではあり得ない．普通われわれは便宜的に時間に外的刻印を押して，多かれ少かれ便宜的な過去や未来を含んだ曖昧な現在という観念を現在と考えているだけであつて，現在が一瞬前の過去と一瞬後の未来から隔てられているとされている，その隔たりを無限に精密に計るならば，そのような現在は消滅してしまうのである．どのように僅かであつても過去や未来を含んでいる現在とは現在ではないのである．外的世界に於ては現在は成立たないものである．現在が消滅すれば現実も消え去り，事実だけが淋しく残るのである．また現在が消滅すれば過去も未来も消滅する．過去も未来も現在もない時間とは虚無であり，虚無である時間は現実的ではない事実の衝撃によつて刻印を押されることはないのである．すべては，永遠という虚無の中に溶解してしまうのである．事物や仕事や事件や行為や思想は証拠や資料という事実として残ることはあつても，時間に刻印を押すことはないのである．時間とは内在的なものであり，過去とは現在に於て確認されないのであり，現実的であつたことがなかつたのであり，本当であつたことがなかつたものなのである．本来時間とは事物や仕事や事件や行為や思想によつて刻印など押すことのできない永遠の虚無なのであり，われわれの内的世界に在るものなのである．われわれは文明の utilité に対する便益という甚だ利己的意図によつて，主観的な刻印を時間に押して単なる記憶や外的行為の助けとしているに過ぎないのである．われわれの歴史という意識は主観的なものであつても，真に客観的なものではあり得ない．歴史に参加するということは文明の utilité に対する便益を守る甚だ利己的行為に過ぎないのである．現存する証拠や資料によつて過去を説明し，そこに法則を見出しても，過去の説明や法則の発見ではなく，現存する証拠や資料の説明であり，法則の発見に過ぎないのである．現存する証拠や資料によつて過去を再構成しても，真の過去ではなく，嘘の過去である．われわれは現存する証拠や資料によつて，過去に対して嘘をつくことができるだけな

のである．われわれは消滅した現在によつて取消された過去に対し嘘という幻影，錯乱，迷いを述べることができるだけである．われわれは外的世界に於て，現在という不在と事実という遺棄されたものを空しく探し廻るだけなのである．従つて Mallarmé は内的世界の光栄ある虚構に取消された過去を呼び起したのである．

Abolie, et son aile affreuse dans les larmes
Du bassin, aboli, qui mire les alarmes,
Des ors nus fustigeant l'espace cramoisi,
Une Aurore a, plumage héraldique, choisi
Notre tour cinéraire et sacrificatrice,
Lourde tombe qu'a fuie un bel oiseau, caprice
Solitaire d'aurore au vain plumage noir…
Ah! des pays déchus et tristes le manoir!
Pas de clapotement! L'eau morne se résigne,
Que ne visite plus la plume ni le cygne
Inoubliable: l'eau reflète l'abandon
De l'automne éteignant en elle son brandon:
Du cygne quand parmi le pâle mausolée
Ou la plume plongea la tête, désolée
Par le diamant pur de quelque étoile, mais
Antérieure, qui ne scintilla jamais.[37]

ここに呼び起された過去のすべては何と不吉な幻影であろうか．われわれは暗い予感に襲われるのである．ここで Mallarmé は alexandrin の 12の響きの様々な配合を使用して，伝統的 alexandrin から期待されている rythme を崩している．そして enjambement や inversion を用いたり，思考の休息や急激な変化を与えないようにしたり何か緩慢な rythme の詩文にしている．古い形式である alexandrin がこのような伝統的な rythme を変革しようとする詩文に用いられているということはわれわれの暗い予感を一層深いものにする．そうではあるが，沢山の同格語や長い形容詞は彼の詩文に緩慢な動きしか与えないのである．多様な響きと緩慢な動きが伝統的 alexandrin を崩そうとしながらもそれを保持しているのである．

……Car tout est présage et mauvais rêve![38]

3

Mallarmé は思考と聴覚と発音器官と肉体とを同時に満足させる総合的な美を Scène に於て創造した．Héradiade は Le phénomène futur に於て習作した女性ではない．彼女は内的上演に耐え得る美そのものを象徴した女性である．Albert Thibaudet が述べたように詩の女神なのである[39]．

O charme dernier, oui! je le sens, je suis seule.[40]

それはまた過去が暗示する取消された未来の外的世界に於ける文明が，chair に及ぼす危険というものに対し，早くも抵抗している優れた資質を備えていた詩人の chair の象徴的告白でもある．

Quant à toi, femme née en des siècles malins
Pour la méchanceté des antres sibyllins,
Qui parles d'un mortel ! selon qui des calices
De mes robes, arôme aux farouches délices,
Sortirait le frisson blanc de ma nudité,
Prophétise que si le tiède azur d'été,
Vers lui nativement la femme se dévoile,
Me voit dans ma pudeur grelottante d'étoile,
Je meurs ![41]

Hérodiade は彼女の体の如何なる部分をも見られたり，触れられることを誰に対しても拒否している．彼女は天空に対してさえ拒否しているのである．見られただけで死ぬということを，過去の不吉な幻影や迷いを呼び起しためのとに予言させようとしているが，これは至高の美である Hérodiade の chair が外的世界から及ぼされる危険の暗い予感に対する断固とした拒否を示しているのである．

詩の女神である Hérodiade は何処で生れたのであろうか．

Vous ayant reflétés, joyaux du mur natal,
Armes, vases depuis ma solitaire enfance.[42]

以上のように述べてあるのを見ると豪奢な壁に囲まれた中で生れたのである．この壁は Armes によつて城の壁と推測され得るのである．従つて Hérodiade は城の中で生れたのである．この城とはわれわれの利己的感覚では認識し得ない夢想の城である．しかしめのとに対し次のようにも述べているのである．

……tu m'as vue, ô nourrice d'hiver,
Sous la lourde prison de pierres et de fer[43]

これらの詩句によると石と鉄の重苦しい牢の下にいたのであるが，これは外的世界が及ぼす危険に対し抵抗するために，まるで牢にいるように重苦しい感じのする生活をせざるを得なかつた詩人の chair の苦悩を表明しているのである．このような所で生れた Hérodiade はわれわれの利己的な感覚や論理を超越した女性である．それ故に彼女はめのとが彼女の悲しい運命を嘆いたのに対して，

Oui, c'est pour moi, pour moi, que je fleuris, déserte ![44]

と答えているように彼女自身のためにだけ花咲いていられるのである．孤独に耐え得る石像のように，この浮き世に何の期待もしないで楽園に目を向けているのである．

Hérodiade は鏡を愛している．一見それは世の女性達の習俗に従つているようでもある．他者から自分に相応しく，或いは，それ以上に美しく見られたい女性心理を反映しているようでもある．しかし Hérodiade がそのような女性心理に動かされているとしても，それは彼女の愛らしい一面を示しているのであつて，男性からそう見られようとしているのではなく，同性のめのとからそう見られたいのであつて，本来めのとのいうようにぞつとする程美しい彼女には，そのようなことを心配する必要はなかつたのである．

Et ta sœur solitaire, ô ma sœur éternelle
Mon rêve montera vers toi : telle déjà,
Rare limpidité d'un cœur qui le songea,[45]

このように彼女は語りながら，鏡の中に映つた自分の姿を妹と呼びかけて，鏡を熱心に見つめるのであるが，そのような彼女には Narcisse の神話を思い起させる面もあるが，しかしそれは決して narcissisme ではなく，自分の中に新しい美と生の無限の可能性を探求していることを示しているのである．

……Tiens devant moi ce miroir.
O miroir !
Eau froide par l'ennui dans ton cadre gelée
Que de fois et pendant des heures, désolée
Des songes et cherchant mes souvenirs qui sont
Comme des feuilles sous ta glace au trou profond,
Je m'apparus en toi comme une ombre lointaine,
Mais, horreur ! des soirs, dans ta sévère fontaine,
J'ai de mon rêve épars connu la nudité ![46]

Hérodiade はめのとが憂慮したような驕慢な女性ではなく，彼女自身の無限の可能性を探求しながらも，その自分を客観的に観察することによつて，自己の評価に耐え得る自分を発見しようとする謙虚な詩女神だつたのである．だからこそ鏡を愛したばかりではなく，彼女の周囲で，すべてのものが鏡の偶像崇拝に生きても良かつたのである．

Et tout, autour de moi, vit dans l'idolâtrie
D'un miroir qui reflète en son calme dormant
Hérodiade au clair regard de diamant…[47]

Hérodiade はブロンドの髪の毛をしていた．しかも彼女の髪には何か秘密があるのである．それは祥ない好奇心をきつぱりと拒否した秘密である．その拒否は文明というものの utilité に盲従しない詩人の英知に向けられた，下劣な揶揄の交つた好奇心を，詩人がきつぱり拒否したのに

似ているのである．Hérodiade は彼女に触れようとしためのとの不吉な迷いを繰返し注意しているのである．われわれにとつて必要なことは，彼女の髪の毛の秘密を了解しようとしないことである．その秘密をわれわれが了解したとしても何も把握し得ないことは明白である．彼女の髪の毛はそのように創造されているのである．われわれは，彼女の髪の毛が人間の苦悩の忘却を広める花々ではなく，しかも残忍な輝きに於てもくすんだ蒼白さに於ても，香料によつて永遠に加工されない黄金であり，金属の不毛の冷たさを保持していることを，彼女とともに望むだけである．

Je veux que mes cheveux qui ne sont pas des fleurs
A répandre l'oubli des humaines douleurs,
Mais de l'or, à jamais vierge des aromates,
Dans leurs éclairs cruels et dans leurs pâleurs mates,
Observent la froideur stérile du métal,[48]

めのとは不吉な取消された過去を呼び起した老醜を代表するような女性である．しかし Hérodiade を育てるために乳を与えた女性であり，incantation によつて Hérodiade を外的世界から隔離し，彼女を保護する女性であり，彼女の命令に服し彼女に仕える女性でもある．Scène に於て登場人物は Hérodiade とめのとの二人だけである．しかも対話の内容にも所謂世間の人気に迎合するような恋愛問題などはないのである．Hérodiade は純潔であることの恐怖を愛し，そして夕方，彼女の寝床に引きこもつて，侵されたことのない爬虫動物のような髪の毛が，無効の肉体にその青白い輝きの冷いきらめきを感じるために，彼女の髪の毛が彼女に起させる恐怖の間で生きたいと思つているのである．彼女は chasteté に燃えているのである．そしてこの catholique な chasteté は後に Cantique de saint Jean へと発展して行くのである．

J'aime l'horreur d'être vierge et je veux
Vivre parmi l'effroi que me font mes cheveux
Pour, le soir, retirée en ma couche, reptile
Inviolé sentir en la chair inutile
Le froid scintillement de ta pâle clarté
Toi qui te meurs, toi qui brûles de chasteté,[49]

Hérodiade は Scène に世に隠れた時代を進んで行くのを思い止つたかのような姿で登場して来るが，そこには彼女の内的な action があり，Scène に mouvement を与えているのである．ほんの一瞬彼女は Scène の中で石像のように止つただけで，すべての生物の chair の悲しい運命を予告するように逃亡して行くのである．文明が chair に及ぼす危険の大きさを察知した詩人の苦悩が現れているのである．

Des ondes
Se bercent et, là-bas, sais-tu pas un pays
Où le sinistre ciel ait les regards haïs
De Vénus qui, le soir, brûle dans le feuillage:

J'y partirais.[50]

1865年7月に Mallarmé は≪Hérodiade, œuvre solitaire, m'avait stérilisé;≫[51] と書いたが，文明が発達すればする程真の創造家は stérilité になつて行く．Hérodiade の逃亡はこの悲しい運命に抵抗しながら，文明の utilité に盲従する生活から主体的に逃亡し，別世界に生き直そうとした Mallarmé の意想を伝えているのである．そして別世界への飛躍のために彼は未知なるものに関心を向けたのである．

J'attends une chose inconnue[52]

Hérodiade は未完成である．これは文明の発達によつて stérilité になつた詩人が，真に創造的世界に飛躍し得るときが来なければ解決し得ない問題であり，Mallarmé の生きている間にそれを完成させる機会は訪れなかつた．Hérodiade は chasteté に燃える女性であつたが，彼女自身の chasteté こそ，早くも chair の危険と文明の危機とを察知し得た Mallarmé 自身の，優れた資質と創造家としての stérilité とを表現しているのであつて，Hérodiade の未完成もそのような詩人の内的苦悩と結びついているのである．Hérodiade は露な花のような自分の唇に対し，

Jetez-vous les sanglots suprêmes et meurtris[53]

と語つているが，Hérodiade の心も決して無傷ではなかつたのである．しかし Hérodiade の未完成はこの作品に対し永遠に未知なる可能性と飛躍とを暗示しているのである．

青春時代の Mallarmé の詩に対し，Baudelaire は大きな影響を与えていたし，また Parnasse も彼を拘束していたのである．しかし独自な詩の領域に到達しようとしていた Mallarmé はこのことに満足しているわけにはいかなかつた．習作や彼の手紙に述べられたような内的苦悩の長い期間を経て，Hérodiade を創作することによつて，そのことは可能となつたのである．

Mallarmé は jeunesse を克服することによつて，chair の問題と対決し，文明が chair に及ぼす危険の大きさを察知し，詩に於て chair が問題となる必然性を発見したのである．しかもこのことが彼の創作を進展させることになつた．そして Hérodiade に於て思考と聴覚と発音器官と肉体とを同時に満足させる総合的な美を創造したのである．

彼は Ouverture と Scène に於て，内的世界に於ける action によつて chair を聖化するため劇形式を採用した．そして strophe のない tragédie の詩形に於て，詩句の句切りに様々な変化を与えたのである．この両者はわれわれの内的虚無にわれわれの思考と聴覚と発音器官と肉体とを同時に満足させる，新しい rythme と内的世界の polymorphie とを感じせさ，真に新しい美の快感をわれわれに与えるのである．彼はまた Cantique de saint Jean に於て ode の形式を採用し詩に於ける musique を重要視したのである．

Mallarmé は内的上演をなし得る手頃な形式の中に，われわれの宝物を奪い返そうと試みたのであるが，外的世界に於ける事物や仕事や事件や思想に拘束された実用語の機能を拒否して，内的世界に於て文明の utilité から解放された，了解によつては把握し得ない宝物を創造しようと試みたのである．彼にとつて事物や仕事や事件や思想を記述したり，話したりすることが問題で

はなく，示唆する（suggérer）ことが問題だつたのである．その示唆の内容は内的世界の実在である．そして parole から隔離をなし終えた全く新しい vers である incantation を創造したのである．彼は世界の凋落による chair の危機によつて chair を把握したのであるが，その場合彼の絶望は深いものだつたのである．そしてこの絶望によつて彼は内的世界へ飛躍し得たのであり，永遠を見出し得る世界に於て過去を呼び起すことが可能になつたのである．彼によつて呼び起された過去のすべては不吉な幻影と迷いであり，われわれに暗い予感を与えるものであつた．古い形式である alexandrin が伝統的な rythme を変革しようとする詩文に用いられ，多様な響きと緩慢な動きが伝統的な alexandrin を崩そうとしながらもそれを保持しているため，われわれに一層深く暗い予感を与えるのである．

Scène に於ける Hérodiade は内的上演に耐え得る美そのものを象徴した女性である．それは過去が暗示する，取消された未来の外的世界に於ける文明が chair に及ぼす危険というものに早くも抵抗している優れた資質を備えていた詩人の象徴的告白であつた．Hérodiade は chasteté に燃える女性であつたが，彼女の chasteté は Mallarmé の優れた資質と創造家としての stérilité を表現しているのであつて，Hérodiade の未完成もそのような彼の内的苦悩と結びついているのである．Hérodiade は Mallarmé と同じく無傷な心を持つているわけではないが，この作品の未完成はこの作品に対し永遠に未知なる可能性と飛躍とを暗示しているのである．

註

1) Paul Valéry : VariétéII, Gallimard, p. 172.
2) 拙稿：ランボオに於ける Le Raisonné Dérèglement について，北海道学芸大学紀要，第1部10巻2号，参照．
3) Ibid. 参照．
4) Stéphane Mallarmé : Correspondance, Gallimard, p. 137.
5) Ibid.
6) Mallarmé の青春時代の詩は，Stéphane Mallarmé : Oeuvres Complètes, Bibliothèque De La Pléiade によるものである．以下，Mallarmé の青春時代以後の詩は上掲の詩集及び Stéphane Mallarmé : Poésies, Gallimard から引用する．
7) Stéphane Mallarmé : Correspondance, Gallimard, p. 154.
8) 注6）参照．
9) Arthur Rimbaud : Oeuvres Complètes, Bibliothèque De La Pléiade, Une Saison En Enfer, p. 219. 尚，Rimbaud の逃亡については上掲の拙稿参照．
10) このことは Mallarmé が1864年末に≪Le phénomène futur≫を創作していることからも解る．
11) Stéphane Mallarmé : Le phénomène futur, 参照．
12) 注6）参照．
13) Stéphane Mallarmé : Divagations, Bibliothèque-Charpentier, Crise de vers, p. 244参照．
14) Racine : Théâtre Complèt De Racine, Classiques Garnier 参照．
15) Stéphane Mallarmé : Divagations, Bibliothèque-Charpentier, Crise de vers, p. 246参照．
16) Ibid. Crayonné au théâtre, p. 199参照．
17) Jacques Scherer : Le "livre" de Mallarmé, Gallimard, p.62, p. 63参照．
18) Stéphane Mallarmé : Divagations, Bibliothèque-Charpentier, Crayonné au théâtre p. 166, p. 167参照．
19) Ibid. Crise de vers, p. 254.
20) Stéphane Mallarmé : Correspondance, Gallimard, p. 137参照．
21) Stéphane Mallarmé : Divagations, Crise de vers, p. 256.
22) Stéphane Mallarmé : Correspondance, Gallimard, p. 136.
23) Ibid. p. 137.
24) Ibid. p. 159.
25) Ibid. p. 164.
26) Ibid. p. 166.

27) Ibid. p. 174.
28) Ibid. p. 207.
29) Ibid. p. 240.
30) Suzanne Bernard : Mallarmé et la musique, Librairie Nizet, chapitre IV, p. 99参照.
31) Stéphane Mallarmé : Correspondance, Gallimard, p. 234参照.
32) Stéphane Mallarmé : Oeuvres Complètes, Bibliothèque De La Pléiade, Le phénomène futur, p. 269.
33) 注6) 参照.
34) Supra, 参照.
35) Stéphane Mallrmé : Correspondance, Gallimard, p. 208参照.
36) 注6) 参照.
37) Supra, 参照.
38) Supra, 参照.
39) Albert Thibaudet : La Poésie De Stéphane Mallarmé, Livre III, p. 388参照.
40) 注6) 参照.
41) Supra, 参照.
42) Supra, 参照.
43) Supra, 参照.
44) Supra, 参照.
45) Supra, 参照.
46) Supra, 参照.
47) Supra, 参照.
48) Supra, 参照.
49) Supra, 参照.
50) Supra, 参照.
51) Stéphane Mallarmé : Correspondance, Gallimard, p. 171.
52) 注6) 参照.
53) Supra, 参照.